

早稲田大学博士論文(概要)		
2008	学位記	文科省報告
	4885	甲 2704

初期近代における方法の概念の誕生と知恵の伝統——ホッブズとヴィーコを中心にして

博士論文の要旨

本稿では、17世紀の科学革命および印刷革命の所産である方法の概念の誕生をめぐる史的考察を手がかりとしながら、あらゆる世界の対象を量的関係へと代数的に還元し、分析・操作しようとする近代知としての方法の概念(ラムスに始まり、デカルトの方法において完成する)が、自然的世界のみならず、人々の意志や情念が支配する政治社会のような実践的領域に適用された場合にもたらされる不都合について、ホッブズとヴィーコの学問方法の概念を中心に批判的な検討を加えている。その不都合とは、とりわけホッブズの政治学の中で顕著に見出せるのであるが、もっぱら以下のことを意味する。すなわち、かつての古典的政治学が理想として掲げた対話的实践の契機を否定することによって手に入れたホッブズの政治学の体系性は、その対象世界を理論的に統制しえたかに見えるにもかかわらず、実際には理論と実践の関係を自らの哲学体系の中で捉え返し、その間隙を埋め合わせる術をもはや持っていないということである。理論から実践への転換は、ホッブズが言うように、単に道具的かつ技術的な関心のみでは成立しないのである。むしろ必要なのは、ヴィーコが主張したように、どこまでも聴衆を相手にし、実践的に有効な説得の技法としての対話とレトリックの伝統なのである。この点に関しては、すでにハーバーマスの古典的な著作である『理論と実践』(1963年)で論じられており、ホッブズとヴィーコを論じる際の基本的な路線となっている。

しかしながら、このような従来の視点のみからヴィーコを捉える限り、啓蒙期のナポリにおいてヴィーコがその著作を通じて実際に何を為そうとしていたのかについての真の理解に到達することはできない。というのもヴィーコもまた、ナポリの知識人の集会のみならず、ヨーロッパの文芸共和国における知的交流を通じて、北方の国々からもたらされる新しい科学革命の成果に深い関心を示し、またそうした知的交流を通じて近代的な知の方法(数学的自然学)の有効性と限界に対する鋭い洞察力を持ち合わせていたからである。今日のヴィーコ研究は、このようなヴィーコの実像を当時のナポリおよびヨーロッパの知的な文脈の中で考察することでより鮮明に描き出そうとしている。その成果は、マツォッタのヴィーコ研究において象徴的に示されており、それは、従来のヴィーコ論においてしばしば見られたように、ヴィーコの基礎命題を中心とする哲学的認識論に終始するのではなく、ヴィーコの詩学を中心テーマに据えながら、歴史文献学、言語学、法学、政治学、神学といった多様なトポスが絡み合ったヴィーコの百科全書的な知の体系の

試みを、当時のヨーロッパ思想史の文脈に即して分析し、総合的に捉え返したという点において、近年における画期的なヴィーコ論であったように思われる。また、かつてのクローチェのヴィーコ論に見られたように、ヴィーコを思想的に政治に無関心なもの(apolitica)と見なす従来の見方に反し、マツォッタの論考は、当時のナポリの社会的な背景を考慮に入れながら、ヴィーコ思想の核心には教育的な実践的問題があることを強く主張している。本稿のヴィーコ論も、ヴィーコの詩学のアクチュアリティを強調する点において、彼のヴィーコ論を全面的に支持するものである。そしてこの点を踏まえながら、ヴィーコ思想の根幹には、道具的な理性ではなく、対話的实践を通じて得られる人文主義的な教養(人間形成)の重要性と知恵の伝統がある点を明らかにした。この点は序論のまとめとなるので、以下においては各章の要点を整理する。

第一部 近代学問理念の方法と論理

第一章 近代学問理念の形成と方法の問題

第一章の第1節においては、古代ギリシャから中世ヨーロッパにおける方法概念の変遷過程を概観し、初期近代におけるラムス主義の興隆とその論理学の改革について考察を試みている。例えばラムスは、古典的な弁論術の五つの構成要素(発想、判断、修辞、記憶、演説)のうち、新しい論理学の構成要素を発想と判断のみに限定し、弁論術を修辞と演説の二つの構成要素からなるものに格下げた。このラムスの論理学の改革は、視覚的な事物の配列としてのトポス論に基づく点において、多分にグーテンベルクの印刷革命と密接に関係しているのであるが、それは結果的に、古典的政治学の実践的な説得の技法であった弁論術を中心とする口頭文化の衰退の最初の契機であったといえる。

第2節においては、ベーコンにおける新しい論理学の構想について考察した。ベーコンは、ラムスの論理学改革が思考の分類には役立つにせよ、未だ自然学において新しい原理を解明する方法にはなっていないと批判し、帰納法と自然誌による新論理学(ノヴム・オルガヌム)の構想を提唱する。ベーコンのいう自然の解明もまた、ラムスに続く、大きな知的変革であることを示した。

第3節においては、デカルトの『精神指導の規則』を中心に、事物の真理の探究に向けての学問の方法について吟味した。まずデカルトの方法概念の基本が明晰・判明な観念による確実性の探求にあることを確認し、その確実性に見合う学問としてデカルトが探求した代数解析と普遍数学の試みについて考察した。その結果として、デカルトの普遍数学の方法は、数学的諸学一般に適応されるものであり、そこに

において確実な知識に到達するための一般的な方法であるということを明らかにした。またその方法が、光学を中心とする自然学に適用された場合の成果として、懐疑主義の克服、人間の知覚構造が機械論的に説明できること、学問の方法が対話ではなく純粋な理性に基づく機械的な計算になった点について確認した。

第4節では、メルセンヌ・サークルにおけるデカルトとホッブズの知的な交流を踏まえて、そこでの光学実験の成果が、ホッブズの機械論的認識論へと結実したことについて論じた。

第二章 ホッブズ哲学の方法と論理

第二章においては、ホッブズの分析－総合に基づく方法概念の系譜について明らかにするために、古代ギリシャにおける分析・総合の方法の誕生から、17世紀にかけてのヴィエト・デカルトを中心とする代数解析の技法の展開と、パドヴァ学派の分解・構成の方法、そしてガリオの運動論について考察しつつ、ホッブズの方法概念の構想の特異性を明らかにした。結論から言えば、古典的な幾何学の方法に依拠するホッブズの方法概念は、パドヴァ学派とガリオの分解・合成に基づく運動論と融合しながら、古代ギリシャの静的な幾何学ではなく、近代の運動学に基づく新しい動的な幾何学の理念を構想していたということである。そしてヴィエト、デカルト、ウォリスらに見られる代数解析の技法が幾何学に導入され、その手法が幾何学の主流になることに対して反対した理由として次の点を確認した。すなわち、幾何学的な総合の方法に依拠するホッブズにとっては、事物の普遍的な原因から結果へと絶え間ない演繹的な推論によって進展していく幾何学的総合の過程こそが推論において何よりも重要であるがゆえに、近代において誕生した代数解析の技法は、幾何学の方法を根本的に強化し得るものではないと考えられたからである。

第二部 初期近代ヨーロッパにおける統治の技法

第三章 ホッブズと近代国家概念の成立

第三章の課題は、ホッブズが、国家論を構想する際に、人間社会をも機幾何学的に構想することを可能にさせた認識の条件を問うことにある。例えば、外的対象と想像的空間との区別による二元論、コナトウスの反作用としての人間の情念の分析、その意志論の分析を通じて得られたホッブズの近代的な人

間像の成立は、そのための不可避的な条件といえるだろう。第2節でそれらの条件を考察した後、第3節においてはホッブズが、自然状態における万人の万人による戦争状態から、その恐怖から逃れるために、人々が理性的に発見した自然法の命令に従うことによって国家が形成されるプロセスを人格の概念を媒介にしながら考察した。しかしながら、そこで平和を求めて成立することになったホッブズのリヴァリアサンにおいては、ただ支配する絶対的な主権者と、それに服従する臣民という確固たる政治秩序が残されることになり、そこにはかつての古典的政治学が有していた賢慮に基づく実践哲学の理念、すなわち、等しき自由な市民が公的な領域の中で、対話と説得による相互の実践を通じて、互いに善き生を求め合うような古典的政治学の理念が存在する余地はどこにもなかった。そこにあるのはただ、絶対的な主権者の剣による威嚇と、それに服従を余儀なくされる死への恐怖と自己保存への衝動に駆られた臣民の存在だけなのである。つまりホッブズの政治哲学においては、もはや公共的な空間において市民が言葉を通じて相互に語り合い、そのような実践を通じて相互の規範を自律的に確立していくような自由な主体的な契機は見失われてしまっているのである。そして臣民たちが有する最大の自由といえども、それは「法の沈黙」に依存し、主権者が何ら規則を設けなかった場合の、いわば主権者の絶対的な権利に対する「臣民の自由」を意味するにすぎない。つまりそれは消極的な意味での自由であり、かつて市民が、言論に基づく実践的な活動を通じて得られるような積極的な自由はもはやどこにも存在しないのである。なぜなら、ホッブズにとっては、もしそうした自由が与えられ、対話的实践が市民たちの間で行なわれるのであれば、そのことは彼らに統治者に対する不服従と反乱の口実を与え、内乱を引き起こす可能性があると考えられからである。それゆえホッブズの政治哲学においては、もはや古典的政治学が有していた実践哲学の意味は完全に変容し、支配者の剣による威嚇を背景にしつつ、自由な市民の対話的实践が喪失した、支配と服従からなるデファクトな力の関係に還元されてしまっているのである。

したがって第4節では、このような政治秩序の中でホッブズのレトリック論が果たす役割を逆説的に吟味し、それが果たしてキケロに由来する人文主義のレトリックの伝統につながるものであるのかどうかに関して、スキナーの論考を批判的に検討することで吟味した。

第四章 ヴィーコにおける新しい学問の方法と知恵の伝統

第4章では、まずヴィーコの人文主義の学問教育理念について概観した後、第2節においてヴィーコの思想を当時のナポリの自然哲学の興隆という文脈に沿って理解するよう試みた。そして数学的自然学

を中心に独断的なデカルト主義が蔓延する当時のナポリにおいて、ヴィーコがその独断主義に対してどのように対処し、自らの思索を展開したのかについて、彼の基礎命題である「真なるものは作られたもの」を中心に考察した。あくまで人知の有限性に立つ懐疑主義者としてのヴィーコは、単に人間の理性の完全性を称揚して憚らない独断論の立場を無批判に受け入れるのではなく、まずは人間の理性およびその認識能力の可能性と限界についての批判的な省察をくわえることの重要性を説くのであり、そしてここからヴィーコが得たのは、自然の事柄について人間の作り出すものは、外的な事物の部分的な把握にとどまるがゆえに、それは第一真理からの二次的な派生物でしかないという認識である。それゆえにヴィーコは、自然についての新しい学ではなく、むしろ諸国民の世界についての新しい学の構想を提唱する。なぜならば人間の文明世界こそは我々が作り出したものであるのだから、我々が本当に理解することのできるのは外的な自然の世界ではなく、むしろわれわれの人間の世界だからある。つまりヴィーコにしてみれば、われわれの自然界についての理解(世界観)はただ一つに固定されるものではなく(ただし現実の生活の中では一般に、自然の法則を批判的に検証することなく、それ自体あるものとして物象化してしまうのだが)、実際には多数の自然学者たちにより多様に解釈されるものであるのに対して、わたしたち人間世界の歴史は真の意味において恣意的に作られるものではないからである。この発想の転換がヴィーコの主著である『新しい学』の構想につながることになるのである。

第3節は、主としてこの『新しい学』を通じてヴィーコの世界政治哲学の歴史的視座について考察している。そのためにまずヴィーコが『新しい学』において描く文明世界の始まりを、主にホッブズの自然状態論を批判的に検討することによって、ヴィーコが描く政治の詩的な起源とそのヴィジョンについて考えてみた。そしてこの考察を通じて、ヴィーコの描く文明社会の始まりがホッブズの描く自然状態論とは全く異なることになった理由を、両者の意志論の差異を検討することで明らかにしてみた。その要点を端的に言えば、ホッブズにとって意志とは、結局のところ熟慮における最後の欲求であったのに対して、ヴィーコにとってのそれは、まさしく人間の情念を昇華しながらそれを人間社会における正義へと向けさせるところの力にほかならない。それゆえヴィーコのいう自由意志とは、人類の根源にあるカオスの状態を抜け出し、人々の諸情念を鎮めながら、文明社会の創設のための根源的な基礎となるのである。ただしここで注意しなければならないのは、太古の人間にとって文明社会のために意志を働かせることが可能となるのは、外的な畏怖の対象を通じてであるというのがヴィーコのいう文明社会論の創設のための根拠となる点であろう。

第4節においては、国家理性の概念を手がかりにしながら、ヴィーコがいかにその概念に影響を受けながら、自らの古代統治論を展開しようとしていたのかについて明らかにしている。また古代ギリシャにおける民主制国家の出現が、民衆の自己認識の発展の所産であることの意義を、ヴィーコの古代統治論に即して考察した。

第5節では、ヴィーコが自らの文明社会論を展開するのを可能にしたトピカ的な知恵の伝統の再検討するために、まず彼の主張する知恵の概念を、プラトンが述べる自己の魂への配慮としての知恵の伝統と、キケロの述べる学識ある弁論家としての知恵の伝統と照らし合わせながら、その両者の概念がまさしくヴィーコの知恵の概念の根幹となっている可能性を示した。すなわち、プラトン主義者としてのヴィーコの知恵の概念は、他者との対話的実践の交わりの中で自己の無知を自覚し、さらなる人間の完成に向けて思慮の健全さと正義にかなった行動を保つことにほかならない。それが、ソクラテス・プラトンの見ても、公的な領域において自由人として振舞うための実践的かつ倫理的な規範となるということである。またキケロ主義者としてのヴィーコの観点から見れば、知恵ある人とは、個々の特殊な状況に対して適切に振舞い、また品位を持って正しく語ることのできる者のことをいう。つまり、ヴィーコの知恵の概念の中には、公的な場において品位を保ちながら言葉豊かに語るための雄弁の技法が包摂されており、知恵と雄弁の技法は相互に補完し合っているのである。したがって、ヴィーコにとって知恵の概念は、賢明に語るための説得技法である雄弁の概念を離れては存在しえないのであり、それらは相互に密接に関係しているのである。この点においてヴィーコの知恵の概念は、プラトンの知恵の伝統とともに、明らかにキケロ的な人文主義のレトリックの伝統に忠実であるといえるのである。そして賢明に語るための能力を養うためにも、ヴィーコは、キケロのいう学識ある弁論家として知恵と雄弁の結合という人文主義の理念を体現する必要性を説いたのであった。つまりヴィーコにとって弁論術とは、認識する知と実践する知との両者を併せ持つものでなければならず、それら両者を合わせて初めて、あらゆる知識学芸を言葉豊かにかつ総合的に語るための英知となるのである。そのためにも、弁論術は、あらゆる理論的知識と実践的な技法とが統合された万般の豊かな知識、言い換えれば「森羅万象すべての事柄についての知識」を要するのである。つまり弁論家は、文学、歴史、法律、絵画、彫刻、数学、医学、天文学、自然学といったあらゆる事柄についての知識を身につける限りにおいて初めて、人間的教養を備えた真に学識のある弁論家となり得るのであり、語りうるあらゆる事柄について知識豊かにかつ多彩に発言することができるのである。それゆえヴィーコは、理論的知識と実践的知識を峻別しながら、哲学と雄弁を分離し解体しようとする近代のあらゆる

哲学的な試みに対して警鐘を鳴らすと同時に、青年たちが、詭弁家としてではなく、学識ある弁論家として大成させるためにも、まずはあらゆる学問領域を修得するよう要請するのであった。

結論 ポイエーシスとプラクシス——近代における自然と技術について

結論では、ホッブズの政治学がわれわれに残した理論知と実践知との乖離の問題に焦点を合わせながら、それを乗り越えるための総合的な視点としてのトピカ的な知恵の可能性を、再度ヴィーコとともに掘り下げて考察してみた。具体的に言えば、メタファーとインゲニウムに基づく人文主義的な知恵の伝統の涵養こそが、近代知と古代人の知恵との和解を可能にしながら、ホッブズに典型的に現われている近代の統治テクノロジーがもたらした負の遺産を克服することにつながるのではないかという点を強調してみた。

山口正樹